

一般選抜後期日程における入学辞退率改善の取り組み ——徳島大学B学部の事例から——

植野美彦¹⁾，櫻谷英治²⁾，関陽介¹⁾，上岡麻衣子¹⁾，浅田元子²⁾，
赤松徹也²⁾，宮脇克行²⁾，宇都義浩²⁾，田中保²⁾
徳島大学高等教育研究センター¹⁾，徳島大学社会産業理工学研究部²⁾

1 B学部の入学者選抜と課題

大学全入時代が現実味を増し、受験生を「選抜」と言うより「確保」という言い方が妥当な時期に突入することになる。個別の大学は、その「確保」に向けて、入学者選抜の多様化を図るとともに、アドミッション・ポリシー（以下、APと略す）に合致した入学者を求める活動を展開している。

徳島大学B学部（入学定員100名）は、中央教育審議会答申（2014）及び高大接続改革実行プラン（2015）で示された、学力の3要素から構成される「確かな学力」の評価を網羅するなど、多面的・総合的に評価する個別選抜の開発を行うとともに、APの実質化に積極的に取り組んでいる（植野，2017）。そして、その検証を行うべく追跡調査（関ほか，2021）を実施し、その結果をもとに評価方法の見直しや多様化した入学者選抜の検証など、その知見を集積している。

このことで入学者選抜の改善を繰り返してきたが、開設当初より頭を悩ませている課題が存在している。それは、一般選抜・後期日程における入学辞退率の高さである（表1）。近年、国立大学では、一般選抜・後期日程を廃止し、前期日程もしくは総合型選抜や学校推薦型選抜への募集人員の移行が進んでいる。後期日程は、第1志望者が少なく入学意欲が低い傾向が一部で見られることなどが指摘されており、このことは入学時アンケートの結果からもそれを裏づけている（図1）。そこで、B学部内で後期日程廃止論議が浮上する訳だが、植野ほか（2021）は、「地方国立大学においては入学定員を安定的に確保するために、後期日程の設定は入試戦略上、重要な位置づけとなる」ことを指摘し、関ほか（2021）によれば、徳島大学のB学部後期日程から入学した学生は相対的

にGPAが高いため、成績優秀な学生が入学していること、さらに大学院への進学率が高いことを指摘しており、後期日程の実施はB学部にとって有益なものだと判断してきた。

以上のことから、現行の枠組みを大きく変えることなく入学辞退率改善に向けた取り組みを検討するに至った。その詳細について述べていく。

2 後期日程における入学辞退率改善の取り組み

入学を強く希望する（入学辞退をしない）一定の母集団を獲得することは進学説明会や相談会などの活動では限界があるため、その集まった母集団に対して個々にアプローチする手法を軸に検討し、解を導いた。受験者に対する入試広報、すなわち「受験者広報」である。受験者と入学前に直接的な接触をする機会は入学試験当日のみである。そこで、入学試験当日、受験者に対して試験監督者からの励まし（encouragement）を行うこととした。入学試験当日（個別試験）の試験監督者は、入試ミスがないよう細心の注意を払うことに頭を奪われるため、その場においての入試広報はあまり考えられない。「受験者広報」は、その点に着目したものである。

その手順は、入学試験の当日に入学試験委員長から各試験会場の主任監督者^{注1)}へ励ましを行うよう要請するだけであり、複雑な工程を踏んでいない。励ましは、入試ミスの発生リスクが少ない答案回収後に行い、敢えて、専用マニュアルを準備せず、主任監督者自らのことばで伝えることを求めている（よって、励ましの具体的な内容は各主任監督者の判断に委ねている）。マニュアルを準備すると通常の試験監督者と同様に機械的に読み上げるだけとなることも考えられ、受験者に

適切なメッセージが伝わらないためである。試験監督者が受動的な態度ではかえって逆効果になることも想定しておく必要があり、慎重な対応が求められることを指摘しておきたい。

3 「受験者広報」による成果

「受験者広報」を実施した2021年度入学者選抜は、表1の通り入学辞退率が改善し、本学部が設置された2016年度以降で最も低い結果となった。但し、単年度のみで評価することは望ましいものではないため、長期的に観察していく必要がある。また、県内、県外合格者数が入学辞退率に大きく影響する（県内生は自宅通学が概ね可能なことや地元志向が作用するため辞退者は少ない）ことなどにも注意が必要であるが、一定の成果を出したことは今後の18歳人口の市場環境、そしてタイトな期間かつセンシティブな業務である追加合格などの事務手続を鑑みれば、継続して実践する価値は高いと考えている。

また、2021年度入学者選抜は、コロナ禍の最中であり、後期日程となれば受験生の疲労感も想像がつくだろう。そこに温かいメッセージを伝えたことは、受験生へのいわゆる「癒し」にも繋がったのではないだろうか。

4 結び

「受験者広報」は入試広報を行う中でのアイデアのひとつに過ぎないが、大学入試を教育の一部と捉えるならば、教育的効果に繋げることが可能でないかと筆者らは考えている。一般選抜・後期日程受験者は、合理的に考えれば、学校推薦型選抜や総合型選抜入学者と比較して、学習時間が長いことは明らかである。しかし、後期日程受験者の課題は、学習の準備はできていても、大学教育を受ける準備（カレッジ・レディネス）は十分ではないことが想定される。今後もその準備教育、改善、そして受験生との対話を繰り返しつつ、よりよい高大移行システムの創出に向け、多角的な視点からアイデアを出していくことが欠かせないだろう。

表1 B学部 一般選抜（後期）入学辞退率過年度推移

入試年度	合格者	入学者	辞退者	入学辞退率
2016年	22	15	7	31.8%
2017年	31	19	12	38.7%
2018年	29	20	9	31.0%
2019年	29	25	4	13.8%
2020年	32	22	10	31.3%
2021年	34	30	4	11.8%

補足) 2016年度～2020年度の募集人員は20名（入学定員の20%）、2021年度の募集人員は22名（入学定員の22%）。

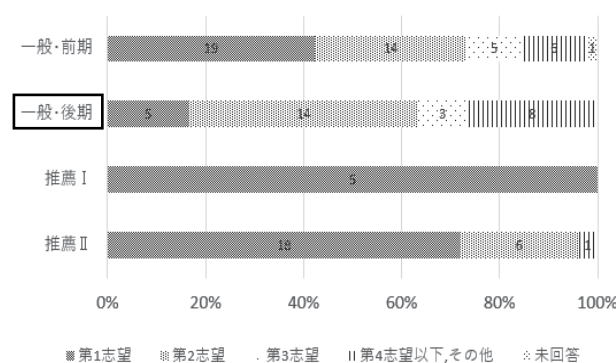


図1 B学部の志望順位 2021年度入学時アンケート (n=105)

注

1) 主任監督者はすべてB学部の専任教員である。

謝辞

今回の取り組みは、試験当日の主任監督者の各先生方、事務課の正本理恵係長をはじめとする学務係各位に多大な協力・支援をいただいた。この場を借りて厚く御礼申し上げる。

参考文献

- (1) 中央教育審議会 (2014). 「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育, 大学教育, 大学入学者選抜の一体的改革について」(答申)
- (2) 文部科学省 (2015). 「高大接続改革実行プラン」
- (3) 関 陽介, 植野美彦, 澤田麻衣子 (2021). 「入学者選抜を改善するための入試区分別の追跡調査」『大学入試研究ジャーナル』**31**, 13-20.
- (4) 植野美彦 (2017). 「徳島大学生物資源産業学部の個別選抜改革——高大接続改革実行プランを受けた多面的・総合的評価の設計と実施——」『大学入試研究ジャーナル』, **27**, 1-7.
- (5) 植野美彦, 関 陽介, 寺田 賢治, 山中 英生 (2021). 「一般選抜における「志望調書」の導入と課題——学力試験では測れない能力や態度を一般選抜で評価することをめざして——」『令和3年度全国大学入学者選抜研究連絡協議会大会 研究発表予稿集 (C用)』38-43.